

SDGs 時代における科学技術のあり方  
—ブダペスト宣言から 20 年—  
第 8 回研究会  
(2020 年度第 1 回)

1. 日時 2020 年 5 月 25 日(月) 12:30~14:30

2. 場所 オンライン研究会

3. 出席者 ※敬称略

代表者 有本 建男	国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学客員教授、 科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー
大竹 晓	東京大学東京カレッジ副カレッジ長・未来ビジョン研究 センター特任教授
隠岐 さや香	名古屋大学大学院経済学研究科教授
小寺 秀俊	理化学研究所理事、OECD 科学技術委員会日本代表・副議長、 京都大学名誉教授・特定教授
駒井 章治	東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
新福 洋子	広島大学大学院医系科学研究科教授
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
(欠席) 狩野 光伸	岡山大学副理事・大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授、 外務大臣次席科学技術顧問

国際高等研究所事務局

三石 祥子、森口 有加里

4. 議事進行

- (1) 各先生から、7、8 分程度、COVID-19 の、それぞれの分野、機関活動、高等研研究会報告書・執筆部分への影響などを紹介
- (2) 後半(1 時間) は、自由討論、報告書の方向性の検討など

5. 実施の趣旨

<有本先生より>

研究会各委員の方々は、報告書の担当部分について検討を深め、執筆を進められていると思います。一方で、現下の COVID-19 は、近代が形成してきた民主主義、資本主義、科学技術啓蒙主義に、根本的な問い合わせを迫っています。10 年先の心配あるいは課題が今一機に我々の前に立ち現れていると言つていいと考えます。

この困難を克服するために、科学技術への期待が大きくなると同時に、それぞれの国の制度体制、科学技術システムの強さと弱さが、市民にも分かるように、露呈しているようです。コロナの今後の展開は見通せず、不確実な状況が数年は続きそうです。この中で、デジタル革命は急速に進んでおり、米中のハイテク摩擦は激化の一途を辿っています。

近代が築いて来た科学技術の何を保持し、何を変えるのか。ポストコロナ時代の「科学とは何か」、「科学者とは何か」、「科学と技術の関係は」。また、SDGs とコロナの関係性をどう整理し対応して行くのか。SDGs と同様に、コロナも STI の価値観とエコシステムの変革を迫っています。

日本をみれば、政治、経済、市民生活、科学技術とともに、コロナの後に待ち受けている状況は極めて厳しいと予想せざるをえません。不況や財政逼迫も絡んで、科学技術の世界的な趨勢、地勢、主題、方法は、国内外ともに大きく変貌する可能性があります。

この厳しい過渡期とその後に来る時代には、今までの「常識」では想像できない、科学技術の主題と方法が必要になるかもしれません。従来の延長でない、科学技術のあり方、価値、システムについて、深く考察し、課題を根幹から洗い出す。これらの考察を、広く内外に提案し、人々と対話し、連帶の輪を広げていく必要があります。

こうした活動は、日本で今生まれつつあるはずで、高等研のこの研究会は、それらを意識的に繋ぎネットワークを形成していく責務があると考えます。

## 6. 論点：COVID-19 と SDGs と 21 世紀の科学技術（試案）

### (1) ポストコロナ時代の価値観と科学技術システム。

SDGs とポストコロナの接続。その背景となる、民主主義、資本主義のあり方。

国と地方の役割と責任、科学技術システムへの影響。

### (2) 科学技術の方法論としての還元細分化、ピアレビューシステム。

Fragmentation の克服：「境界を越える」

研究現場の危機。ボトムアップとトップダウン。

科学技術の文化・精神・制度。

### (3) 人文学、社会科学のあり方。理工系との連携。

### (4) 「学問の自由」、「大学の自治」、「大学の教育」とは何か。

### (5) デジタル革命。人類と AI との共生、ビッグデータの方法と適用。

デジタル変革と科学技術の変容。

### (6) 科学と政治と社会の関係性。（例）「コロナ専門家会議」の役割と責任・位置と機能。

科学技術リテラシー、社会リテラシーとコミュニケーションと相互の信頼形成。

ブダペスト宣言の持続と超克。

省察（Reflection）、評価と再デザイン・アクションのサイクル。

### (7) 科学技術外交、科学と技術の国際政治・安全保障。

Science diplomacy と Technology diplomacy の分離。

米中のハイテク霸権争いと日本の位置。

Research integrity と研究倫理。

日本の科学技術とアジア・アフリカ。

—以上—